●あぶみ・あさき
1984年生まれ。秋田市出身。北欧ノルウェー在住。2008年にオスロへ渡り、オスロ大学大学院メディア学修士号を取得。ジャーナリスト、写真家、メディアコーディネーターとして活動中。現地の政治・選挙から文化などの幅広いテーマについて、Yahoo!ニュース 個人、朝日新聞Globe、地球の歩き方オスロ特派員ブログなど、日本のメディア向けに数多くの寄稿をする。

ジャーナリスト／写真家／メディアコーディネーター

鐙　麻樹

ノルウェー版「都会の農業」

北欧ノルウェーといえば、オーロラ、フィヨルド、養殖サーモン、『叫び』を描いた画家エドヴァルド・ムンクが有名です。国際ランキングなどの調査では、「働く女性やママに優しい国」、「幸福な国」という側面でも話題になることがあります。1年のおよそ半分ほどが冬ではないかと感じる雪国で、長く暗い冬を毎年迎えますが、秋田で育ったおかげで、寒い冬とはうまく付き合っています。

今回、オスロから秋田に届けられることは何だろうと考えました。ぱっとひらめいたのが、全国各地で起きている「自家栽培ブーム」、オスロでの農業計画「ビーボンデン」（意味：都会の農民）でした。

オスロ中心部にあるフィヨルド沿いでは、大規模な再開発計画が進んでいます。高い灰色の建物が建設中のエリアと、海沿いの間には、対照的な光景が。緑色の畑とカラフルな花畑が広がっており、市民が畑仕事をしているのです。4羽の鶏が卵を産み、コンポストやミツバチの巣箱、パン工房も設置。

この「ローセテル地区」では、都会での農業計画が2015年にスタート。支援者の1割は自治体、残りは銀行・農業団体・民間企業などです。ノルウェーのメッテ・マーリット皇太子妃、農業大臣、自治体の議員らも視察に訪れています。

私の取材する傍らでは、幼稚園の子供たちが鶏をじっと見つめていました。

「4000平方メートルの敷地内の四分の一には、500箱の木箱があり、市民が小さな畑として使用可能。あの幼稚園も木箱で自家栽培していて、毎日子供が遊びにきます」と話すのは、責任者のアンドレアス・カッピョンさん。

残りの敷地ではみんなで畑作業、毎週水曜日には一緒に作物を採って、調理をして、夕飯を食べるなど子供から大人、移民まで、地元で人気のイベントだそうです。都会の中心部でみんなとシェアする大きな畑は、人々が集まる新しい居場所、「コミュニティー」となっていました。

同氏は、「男女が外で働き、スーパーでは出来たての食材が安く手に入るように、食のシステムは効率化され過ぎた。だから自家栽培が新鮮に映るんです」と、ノルウェーで自家栽培の継承が途絶えた背景には、働く女性が増えたことを指摘します。

また、「都会の農業」計画の立ち上げメンバー、フランチャイスキーニーさん、ヴァンデソーさん、フラングさん（左下写真の3名）にもお話を伺ったところ、「自家栽培が、祖父母から孫へと受け継がれなくなった。2世代を挟むと、今の若者は農作物がどう育っているのか、分かっていない。この農地では100％オーガニックで、農薬は使わない。人と人がつながり、小さな経済圏がうまれる効果もある」と語っていました。

工事の音が響くコンクリート街と海辺の間に、ひっそりと立つ緑のオアシス。まるで異次元かのような、ゆったりとした時間が流れていました。ノルウェーの人は環境問題というテーマには敏感です。これから、このような小さな「都会の農家」経済圏が続々と発展していくのかもしれません。

コンクリート街と海辺に隣接する畑

「都会の農業」計画の
立ち上げメンバーの3名